大阪市戦災地の有用野草と其の利用に関する研究*

三 鍋 昌 俊

(大阪府立農事試験場)

Studies on the useful weeds and their utilizations in
the burnt land by war-fire in Osaka. M. Minabe.

緒 言

今次戦争により大阪市は惨憺たる災害を蒙り、5134 町歩（全市の 27 %）を焼野ヶ原と化したのである。この戦災焼跡地に自生する雑草の中で直接間接に人生に役立たせ得る有用野草に就き、その利用法を研究することは大消耗都市大阪市に取つて重要な意義を有するものであると考える。

その第一は飼料としての利用であるが又食用、薬用その他の方面への利用も全然意義のないことでもあるまい。

特に食用は戦争末期より終戦後にかけて救糧食物として盛んに利用されたが現在は殆ど省られていない。

以下之等に就いて若干検討を試みることにする。

飼料としての野草

終戦後食糧に窮乏を告げ、畜産物特に肉も主食に劣らぬ程重要性が高まるに伴い家畜飼養熱が著しく向上し、大阪市内戦災地で之等目的のために利用されているもの決して少しとしない。家畜としては山羊、兎が盛んである。大阪市の戦災地に自生する野草は其の種類甚だ多く、其の中毒草が飼料として価値のないことは勿論であるが、無毒草といつても家畜が食べることを好まないものは飼料として有用とは云えない。故に家畜の食べる程度の草を以つて飼料用野草とし且つ利用出来る程度に到る處に自生を見るものを取上げて見るならば次の如くである。

キク科……………ヨモギ、カワラヨモギ、オトコヨモギ、ハハキギク、ウラギク、センダングサ、アメリカセンダングサ、コセンダングサ、タウコギ、ノアザミ、タカサブロウ、ヒメムカシヨモギ、アレチノギク、ハウコグサ、キツネアザミ、ニガナ、チシバリ、ヨメナ、コオニタビラコ、ツワブキ、コウゾリナ、ノボロギク、アキノキリンソウ、オニノゲシ、ハルノゲシ、アキノノゲシ、ヒメジョオン、タンポポ、オニタビラコ、オナモミ、アカネ科……………ヤエムグラ、オホバコ科……………オホバコ、ヘラオロバコ、ゴマノハグサ科……………イヌノフグリ、タチイヌノフグリ、ナスビ科……………クコ、セリ科……………セリ、スミレ科……………スミレ、マメ科……………ゲンゲ、カワラケツメイ、ヤハズソウ、ハリエンジュ、シロツメクサ、スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、カスマグサ、ハマエンドウ、アブラナ科……………ナヅナ、タネツケバナ、マメゲンバイナヅナ、イヌガラシ、ナデシコ科……………ミミナグサ、ウシハコベ、ハコベ、スベリヒユ科……………スベリヒユ、ヒユ科……………キノコヅチ、ツルノゲイトウ、アカビユ、ヒユ、ハリビユ、ノゲイトウ、イヌビユ、ムラサキビユ、アカギ科……………アカザ、コアカザ、イソハハキギ、ハハキギ、ハマアカザ、タデ科……………ミゾソバ、スイバ、ギンギシ、ツユクサ科……………ツユクサ、イネ科……………カモジグサ、スズメノテツボウ、ジユズダマ、メヒシバ、イヌビユ、オヒシバ、カゼクサ、スズメガヤ、ニワホコリ、チガヤ、ススキ、チヂミザサ、チカラシバ、ヨシ、ミゾイチゴツナギ、スズメノカタビラ、ヒエガエリ、エノコログサ、ムラサキエノコロ、

* 昭和 24 年 2 月 19 日第 82 回講演會に於て發表 同日受理

日本作物學會紀事 第 19 卷 第 1~2 號

マコモ、ネザサ

以上 16 科 84 種の野草を擧げることが出来るが、その内特に數量が豊富で利用價值の高いものは印を附した數種に過ぎない。之等は單一な群叢、群落を形成しているものもあるが、混成群落内に於て有力なものとなつてゐるものが多い。このことは大阪市戰災地に於ける飼料用野草の一大特徴を形成するものである。特にヒユアカザは繁殖力極めて旺盛であり、自然に放任した場合有望な將來性を有する種類である。

扱て之等の野草を總括し一般的に次のことが云えるのではないかと思う。

キク科……………苦味と芳香を有し、家畜の嗜好を促し消化を旺盛ならしめる効がある。

マメ科……………野草中最も蛋白質に富み飼料價值が高い。

イネ科……………收量多く家畜の嗜好にも適している。

次に主なる家畜に就いてそれらの家畜の嗜好するものを擧げて見れば、

馬……………チガヤ、ススキ、スズメノエンドウ、メビシバ、イヌビエ、オヒシバ、エノコログサ、ヨメナ、ヨモギ、タンポポ、ゲンゲ等主にイネ科の野草を好むようである。勿論乾燥して秣にする關係も大いにある。

牛及山羊……………ヨモギの類、アザミの類、ハルノノゲシ、アキノノゲシ、オニノゲシ、タンポポ、オホバコ、ゲンゲ、其他マメ科の植物、アカザ科の植物、イネ科の植物等比較的廣範圍に亘つて攝草するが特にイネ科、マメ科の野草を好むようである。

兎……………ヨモギ、ノアザミ、ハウコグサ、ヨメナ、オニノゲシ、ハルノノゲシ、アキノノゲシ、タンポポ、オホバコ、ヘラオホバコ、クコ、セリ、ゲンゲ、ハリエンジュ、シロツメクサ、ナヅナ、ハコベ、ウシハコベ、アカザ、ハハキギ、ミゾソバ等で一般に軟い草を好むようである。

なお參考迄に二三特殊な野草につき特記する必要がある。即ちマメ科のハリエンジュは好飼料であるが之を馬等に餘り多く連用すると腰骨麻痺になるようである。又ハマエンドウは馬に與えると骨軟症を防ぎ得ると云う。

次に野草の刈取時期に就いて記すと、野草は刈草として青いものをその儘與えるほか、乾燥として冬季の飼料とすることが多い。しかし野草の刈取時期に依つて營養分に非常な差異のあることは衆知の通りである。

一般に若いものほど飼料價值が高いが、乾燥困難で腐敗し易い、しかし遅れると莖葉が硬化して可消化分を減ずる。依つて之等の事を念頭に置いて適當に各植物に就きその時期を決定すべきである。例えばヨモギは 7、8 月に、イネ科の野草では 9、10 月に刈取る。然し之等は少し早刈した方が飼料價值が高い。

又マメ科の野草は開花期を刈取期とせねばならない。之等の乾燥したものは可消化蛋白質が人體 15—20 % 位含まれる。

最後に毒草を列記して便に供しよう。

ナスビ科……………ヨウシユチヨウセンアサガホ、イヌホトツキ、キョウチクトウ科……………キョウチクトウ
セリ科……………ドクゼリ、ウコギ科……………ヤツデ、ウマノアシガタ科……………ウマノアシガタ、キンボウゲ、
タガラシキツネノボタン、ヤマゴボウ科……………ヨウシユヤマゴボウ、オシロイバナ科……………オシロイバナ

以上 7 科 11 種である。

食用としての野草

戰爭末期より終戦後にかけて盛に利用されたが、現在では殆ど省みられていないのは食糧事情幾分向上したとは云え誠に遺憾なことである。進んで利用の途を開くべきであり、更に一步を進めて野草の中から適種を選定して作物、蔬菜に移して栽培を行い、且つ又改良をも加えるべきでなからうかと考える。

現在の國情に於ては野草利用の第一目標を特に主要食糧の補充に置き「糧」とするか粉食の材料とすることが望ましく「菜」とすることも亦必ずしも悪くはなく、種類によつては之を可とするものがある。元來野草は云う迄もなくイモ類を除いた蔬菜類よりも蛋白質、ビタミン (A, B, C, D)、脂質、糖質、熱量等何れも一般に多く脂質は 2 倍、ビタミンは B₂ 約 2 倍半、C 約 2 倍に達するから頗る營養分に富んでいるが、反面殆ど 3 倍の纖維を含んでいる爲め質が堅く又灰分も平均約 0.48 % 多い。灰分中には磷酸、石灰、鐵等の無機鹽類が含まれ、所謂アクが強いので (例外もあるが) 野草の多くにアク抜きが必要が起ること及び前記の纖維が多いことの二點は食用として著しい缺點とせざるを得ない。上述の事柄から野草が必ずしも優つてゐるとは

云えないが、併し捨て去るべきものとは決して考えられない。食糧事情の良くない現在寧ろ進んで利用すべきではなからうかと考えられる。各地域に應じ利用し得る野草の種類、自生地、數量等を明かにし、利用期を誤らず適期に大量を集めるべきであり又「菜飯曆」を定め之に従つて計畫的に採集利用すべきである。尙努めて乾燥貯藏や乳酸醗酵食料の漬込等も行ふべきである。毒草に注意し公定的毒草は之を確實に識別しなければならないが、その他のものについては餘り神經過敏に考えなくてもよい。

刈取時期並に公定的毒草は飼料としての野草の項に同じである。

以下大阪市内に於て利用出来る程度に且つ到る處に自生を見る食草の中、主なるものを拾い上げて見るならば次の如くである。

キク科……………ヨモギ（若苗を採り草餅にするのは衆知の事であるが、又茹でて和物、浸物とする。乾燥して貯藏して置けば適時利用される。）、カワラヨモギ・オトコヨモギ（同上）、タウコギ・タカサブロウ・ハハコグサ・ヨメナ（若い時又は軟い部分を茹でて水替し和物、浸物にする。）、キツネアザミ・ニガナ・ノボロギク・オニノゲシ・ハルノゲシ・アキノゲシ・タンポポ（軟い根生葉を採り茹でて水に浸し和物、浸物とする。）
アカネ科……………ヤエムグラ（軟い莖葉を茹でて水に浸し煮食する。）、オオバコ科……………オホバコ（若い根生葉を茹でて和物、浸物にする。）ゴマノハグサ科……………イヌノフグリ（同上）、ナスビ科……………クコ（軟い葉を茹でて浸物にしたり汁の實にする。茹でて陰乾し貯藏してもよい。クコ茶として飲用する。）ヒルガホ科……………ハマヒルガホ（茹でて水替を二、三回して一晝夜浸水して苦味を去り、和物浸物とする。地下莖も食うことが出来る。）セリ科……………セリ（和物、浸物、煮食何れにも適する。莖は匍匐してよく殖えるので水濕の多いところでは莖を切つて繁殖させ栽培すべきである。）スミレ科……………スミレ（開花前の全草を採つて茹でて和物、浸物、汁煮にする外、根は細斷して混飯用にする。）タカトウダイ科……………アカメガシワ（若葉を茹でて和物、浸物とする。）カタバミ科……………カタバミ（生葉をもんで食べる。又茹でて浸物、煮食、漬物とする。）マメ科……………ゲンゲ・カワラケツメイ・ヤハズソウ・シロツメクサ・スズメノエンドウ・カラスノエンドウ・ハマエンドウ・カスマグサ（軟い部分を茹でて浸物、煮食にする。）カワラケツメイ（豆茶とされることは周知の通である。）アブラナ科……………ナツナ・タネツケバナ・イヌガラシ（若葉を茹でて和物、浸物、煮食にする。）ナデシコ科……………ハコベ・ミミナグサ・ウシハコベ（若い部分を茹でて水替をして和物、浸物とする。）スベリヒユ科……………スベリヒユ（若い部分を茹でて酢味噌和又は汁煮とする。）ヒユ科……………ツルノゲイトウ・ヒユ・ハリビユ・ノゲイトウ・イヌビユ（幼苗又は軟部分を茹でて和物、浸物、煮食にする。）アカザ科……………アカザ・コアカザ・ハバキギ・ハマアカザ（同上）タデ科……………オホケタデ・ミゾソバ・スイバ・ギシギシ（同上）ツユクサ科……………ツユクサ（同上）イネ科……………マコモ（地中の若芽を茹でて和物、浸物又は煮食とする。）

以上 20 科 54 種の野草を挙げることが出来るが、之等は既述の如く殆ど全部が葉莖部特に若いものが食用に供せられるのである。

この内特に數量が豊富で利用價值の高いものは一印を附した3種であり、數量は大したこともなきも美味な點で利用價值のあるものは……………印を附した種であり、兩者兼備種にヒユ、アカザの2種がある。之等は何れも混成群落を形成しその内の有力種となつている。このことは飼料用野草と同様、大阪市焼跡地の食用野草の特徴を形成するものである。

薬用としての野草

薬効があると云う程度のものであつて一般に廣く利用せられているものではない。之等の中には効力の充分でないものも見受けられる。併し過去の人々の經驗から出て來ていること故全く無効とは謂われまい。程度の問題であらう。自然植物で薬効の著しいものはそれを探つて利用することは何時如何なるときでも結構なことである。販賣薬品の潤澤なときでもそうであるが、現在の國情ではそれが一層必要でないかと考えられる。大阪市内焼跡地に自生しているものの中で主なるものを挙げると次の通りである。

（大部分は莖葉を煎じて用ゐるので之等は單に適用病名のみを記載する。）

キク科……………ヨモギ（下痢、通經）、カワラヨモギ（黃疸、利尿、解熱、祛痰、驅虫）、センダングサ（風邪

熟), タウコギ (盗汁, 下痢, 健胃), ノアザミ (根は利尿, 莖葉は胃病, 生葉はもんで腫物), タカサブロウ (胃病), ハウコグサ (鎮咳), ニガナ (胃病), ヨメナ (利尿, 解熱), アキノノゲシ (解熱, 白汁液は皮膚病) ノボロギク (月経痛, 疝痛, 搾汁は痔, 腫物に塗布), タンポポ (健胃, 解熱, 發汗), オナモミ (果實は煎じて解熱, 發汗, 頭痛に, 莖葉は疥癬, 濕疹, 虫傷に塗布) オニタビラコ (汁液は解熱), オホバコ科…………オホバコ (健胃, 利尿, 種子は煎じて鎮咳, 止瀉, 利尿, 強壯, 下痢止, 生葉を焙つて腫物の吸出用), ナスビ科…………クコ (果實は健胃強壯劑, 葉は煎じて解熱に, 根皮は煎じて肺, 肝, 腎臓に用う), セリ科…………セリ (神経痛, 吐瀉), タカトウダイ科…………アカメガシワ (樹皮, 葉を軟くして腫物に塗布), カタバミ科…………カタバミ (生葉をもんで毒虫刺傷, 疥癬に貼布), マメ科…………ゲンゲ (利尿), カワラケツメイ (胃弱, 利尿, 成熟莢果は利尿, 腎臓炎), アブラナ科…………ナヅナ (利尿, 解熱, 黒燒は下痢腹痛), ナデシコ科…………ウシハコベ (利尿), ハコベ (健胃, 盲腸炎, 脚氣, 産後の出乳, 齒痛には鹽でもんですりつける) スベリヒユカ科…………スベリヒユ (淋毒, 惡瘡, 汁液は毒虫の刺傷に塗る), ヒユ科…………キノコヅチ (地下莖を煎じて利尿, 腰膝の痛み, 通經に, 全草を煎じた厚濃液を乳房の腫れに塗る), ノゲイトウ (種子は強壯藥) アカザ科…………アカザ (生葉の汁は毒虫, ナマヅ其他の皮膚病に, 乾葉の煎汁は齒痛のうがい劑), ハハキギ (葉及果實は煎じて膀胱熱, 下痢止, 利尿に), タデ科…………イヌタデ (蛔虫, 淋疾), ミヅソバ (神経痛, ロイマチス, 葉をもんで塗れば止血), イタドリ (根莖を煎じて緩下劑, 利尿, 通經), スイバ (花の煎汁は健胃, 全草の汁液は疥癬), ギシギシ (根の煎劑は緩下劑, 根の搾汁は皮膚病, 腫物の吸出し) ツユクサ科…………ツユクサ (咽喉の痛み, 下劑), イネ科…………アシ (根は煎じて鎮吐, 利尿, 中毒), ハンゲシヨウ科…………トクダミ (全草を煎じて痔疾, 淋病, 微毒, 毒下し, 生の莖葉をもんで腫物, 創傷, 田虫, 毒虫に, その浴湯は腰痛, 疥癬, 田虫に, 煎用は驅蛔虫, 虫下し), トクサ科…………スギナ (全草の煎服は利尿, 淋疾), ナスビ科…………ヨウシュユチヨウセンアサガホ (種子をブローム水素酸, スコボラミン (鎮痛藥) の製造原料強毒性に注意, イヌホボヅキ (解熱, 利尿, 毒性強し要注意), キョウチクトウ科…………キョウチクトウ (樹皮, 葉は強心劑, 連用すれば中毒), ウゴギ科…………ヤツデ (葉のフアットシンは祛痰劑, 湯に入れロイマチス), ウマノアシガタ科…………キツネノボタン (葉は發泡劑), ヤマゴボウ科…………ヨウシュヤマゴボウ (根の煎劑は利尿, 腎臓炎, 肋膜炎, 脚氣),

以上 22 科 43 種の野草を擧げることが出来るが, 前述の如く大部のものは莖葉が, 極く一部のものは根が夫々利用されるのを見る。その數量はアカザを除き前二者 (飼料用, 食用野草) に比し頗る少く, 現状を以つてする限りその利用價值は乏しい。

染料・纖維その他の野草

之等に就いては現在利用されているものはない。唯利用可能であると云う程度に過ぎない。

- (1) アカメガシワ (タカトウダイ科) 市内各地の宅地或は路傍等に見られる落葉喬木で, 葉と種子より赤色染料を製し得る。
- (2) イチビ (アフヒ科) 市内西部特に港, 此花兩區に多く生ずる一年生大型草本で皮部より纖維を製し得る。
- (3) タイワソツナソ (シナノキ科) 港區に點在する一年生大型草本で皮部より纖維を製し得る。

結 言

以上大阪市戦災地の有用野草とその利用に就き述べたのであるが, 大消費都市大阪市の内にある之等の莫大な有用資源が葬られたり或は眠つた儘放任されることなく, 宜しく大いに開發せられ活用されることを望んで已まない。之が爲め眞剣なる關心と眞摯なる研究が必要であると考え。是れ本文の主旨とするところである。(参考文献省略)

Summary

1. By the recent war the fire-raged district was estimated to 50.49 km² in Osaka city. The writer carried out the investigation to study the utilization of wild plants in the district.
2. 16 families, 84 species as fodder plants and 21 families, 69 species as edible plants were found to be dominant.
3. In edible plants almost all of them contain plenty of fiber and buck, but it is not impossible to be utilized for food or flour food material and moreover they contain vitamin especially B₂ and C and plenty of phosphorus. It is desirable to make good use of them by taking care of cooking and harvest time.
4. When these wildplants are used as food and fodder, attention and care should be paid to 7 families, 11 species of legal poison grass mixed among them.